

## 平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

九州大学病院 医療技術部 西川啓

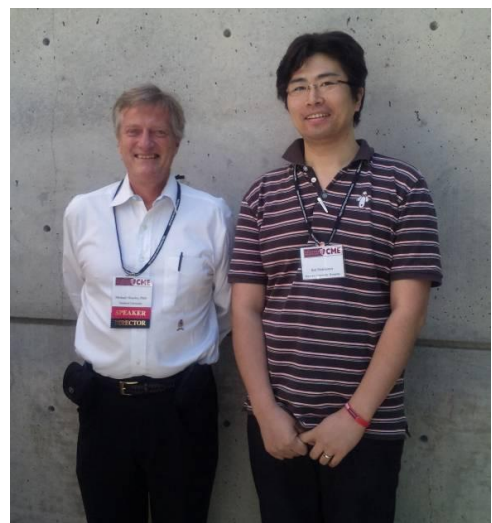
はじめに結論を申し上げる。この研修のすばらしさはこれまで 4 年間、80 名の参加者が異口同音に述べた通りである。だが、それを伝え聞いても得られるものは少ない。賢明な皆様はすぐに参加申込書にサインし、次回開催に備えて頂きたい。この僅か 1 週間で得られるものは、大げさではなく、人生の上でもかなり大きなものと言える。

私は日頃、MRI に従事し、主に拡散強調画像 (DWI) に関して興味を持ち、研究課題としている。Stanford 大学には DWI で先駆的な研究成果を持つ Michael Moseley, PhD がおられる。直接 discussion していくつかの疑問を解消し、MRI の将来展望を得たいと考えた。超高磁場 (7T) での Traveling wave による  $B_1$  不均一の改良や  $\mu$  TE について優秀な講師陣が期待以上の答えをくれた。また運良く、7TMRI で被験者として装置内に入ることを許され、MRI を扱うものとして文字通り、脳を揺さぶられる貴重で未知の経験をした。MRI 以外の講義では、共に参加するそれぞれの specialist 達が的確な質問で理解を助けてくれた。この方々との交流こそが、この研修の真の目的といっても過言ではない。彼らの診療放射線技師に対する高い誇りとその仕事に対する高い motivation は自らを反省させ、更なる向上へと導いてくれる。

アメリカでは全世界でも突出した金額が医療に注ぎ込まれる。その潤沢な資金を背景に、最新の装置を用いた最先端の医療研究が多くの優秀な人材で行われ、それに見合った研究成果を上げている。眩いばかりの光の部分だ。だが同時に、高額になった医療費を払える一部の人間しかその恩恵に与かることはできないという闇の部分も併せもっている。病院では細かな仕事に至るまで分業されていて、患者さんを検査室などに運ぶだけの仕事をする人もいる。垣根を越えて職域を侵すことはできない。仕事を奪うことになるからである。診療放射線技師も X 線撮影を基盤に step-up する形で CT, MRI, 放射線治療などの資格をさらに追加していく。実務経験と license を積み重ねながら、短期間の内により高い給与の席に移っていくのである。3D-lab のような画像処理に専念する合理的な部署を設けることもできる。しかし、時には垣根を越えた理解をもって、CT 画像を参考に MRI を撮像することも必要ではないだろうか。この形は雇用問題を解決しながら、一方で医療費増大にも貢献している。

物事には様々な見方があり、利点も逆の立場から見れば欠点となりうる。本研修での経験や今後の研鑽により、物事を客観的に評価し、現状に合った選択を決断できるような見識を養っていきたい。

最後に本研修にご尽力頂いた Stanford 大学、日本放射線技術学会ならびに GEHC の関係者の方々、また終始、代表者として奮闘された広島大学木口氏、そして参加のために協力をもらった本院諸兄に深い感謝を申し上げる。



講義のあと、あふれる太陽のもとで  
Moseley 先生(左)と拙子(右)